

● 出題の基本方針

国語は、様々な分野の論説を素材として、文章間の論理的なつながり、各文章の正確な理解、文章全体の趣旨の把握を問うという基本方針で出題しました。

● 出題内容とねらい、採点講評

【1日目】

第1問は、原研哉『低空飛行—この国のかたちへ』から出題しました。グローバル時代における日本と世界の新たな関係性について論じた文章です。聞き慣れた／聞き慣れない言葉の意味や、文章全体の趣旨をしっかりと理解できているかを問いました。第2問は、松島潤（編著）『エネルギー資源の世界史』から出題しました。昨今、エネルギー問題は世界的に関心を集めていますが、それは現代に限ったことではなく、古くは紀元前から人類の歴史と常にとともにあった問題です。問題文には経済的な要素も含まれており読みやすいとは言えないかもしれませんが、全体の流れと前後関係を把握すれば正答を得られたと思います。第3問は、漢字の問題です。やや難度の高い漢字を素材に、同音異義語で紛らわしい漢字を判別できるかを問いました。日頃から硬質な文章に親しんでいるかを問うねらいがあります。

第1問の平均正答率は約50%で、やや難易度が高かったようです。特に問7は、正答率が約6%しかありませんでした。②と解答した受験生が多かった（約45%）ですが、全体をよく読めば、筆者がアジアなど各地域に固有の文化を大切に考え、同じ文化圏に属する国々が連携して価値を生み出していくべきだと主張していることがわかるはずで、空欄の前後数行だけを見るのではなく、文章全体の論調をしっかりと理解するよう心がけてください。

第2問の平均正答率は約75%で出題者の予想を上回る値でした。特に問4および問6の接続詞の問題は正答率が高く、文章の流れをよく把握できていたようです。しかしながら、問1では「社会的分化」の意味について誤答の③、問10では誤答の⑥を選択してしまったケースが多く見られました。問題文を理解することはもちろん大切ですが、語彙力や視野を広げるために日頃から多様な分野の本に触れてください。

第3問の平均正答率は約66%で想定に近い値でしたが、問題ごとの差が大きく、90%前後の正答率が複数あった代わりに50%を下回るものもありました。問2

「浸水」、問5「推移」、問10「論旨」が難しかったようです。

【2日目】

第1問は、小塩真司『性格とは何か より良く生きるための心理学』から出題しました。人の性格がどのように変化するかについて、心理学の研究より論じた文章です。比較的読みやすい文章ではありますが、科学的な考察をする文章に対し、論理を読み取り、筆者の見解を正確に把握できるかどうかを問いました。第2問は、吉見俊哉『大学は何処へ』から出題しました。非常に読みやすい文章ですので、落ち着いて読めば正答を見いだすのは安易だったと思います。第3問は、漢字の問題です。短文自体は比較的平易なものが多かったと思いますが、選択肢の同音異義語に惑わされずに適切に用いることができるかがポイントとなっています。

第1問の平均としての正答率は約68%でしたが、正答率の低いものもありました。こうした説明文の問題では、筆者の主張がどこにあるのか、どのような理由から主張しているのかについて、論理展開を意識して読み進めるようにしておくといでしょう。

第2問は全体としてよくできていました。ただし、問5と問6の接続詞問題の正答率は低く、残念でした。前後の文章の関係が順接なのか逆接なのか並列なのかなどをしっかりと読み取れば正答できたはずで、

第3問は、漢字の問題です。問4と問6の正答率が低かったです。漢字の問題は継続的に勉強することで高得点が望めますので、日頃から新聞を読むなどして知識を増やしてください。

● 学習上のアドバイス

「コスパのよい」勉強法というものはありません。文章題については、論説を中心とした読書量を増やすこと、難解な箇所を徹底して考え抜くことを、漢字の問題については、わからない漢字をそのままにせず、きちんと調べることを心がけましょう。日頃からの地道な積み重ねが全てです。

● 出題の基本方針

現代社会は、教科書の内容を問うだけにとどまらず、時事問題に対する理解や、データ・資料を読み解く力を問う方針で出題しています。

● 出題内容とねらい、採点講評

【1日目】

第1問は、社会福祉、年金、高齢化といった社会問題についての基礎的知識を問う設問でした。教科書をしっかり読んでいれば容易に答えられる設問で、70%程度の正答率を想定していましたが、それより若干低め（約65%）の結果となりました。その背景として、設問ごとの正答率にかなり差があり、問2(2)と問4(1)の正答率が30%を下回り、平均の正答率を引き下げることとなりました。それぞれ年金制度と高齢化進展の歴史に関する設問ですが、教科書でもしっかりと説明されている内容ですので、学習量の差がこの2問の正答率に現れたと考えられます。その他の設問は、基本的な用語などを問うもので、概ね正答率が70%以上あり、よくできていました。

第2問は、現代の青年の意識について、データを読み解きながら青年期の特徴について問う設問でした。平均正答率は60%をやや下回る結果でした。特にデータ全体から読み解く必要があった問2(1)、青年期の発達課題や防衛機制に関する問2(3)・(5)の正答率が非常に低かったです。青年期に関する問題は過去のセンター試験や共通テストでも頻出であるだけでなく、受験生のみなさんにとっても身近に必要な知識になります。教科書に載っている表面的な事柄だけでなく、資料集も読み込んで、内容についてもしっかりと理解しておくことが重要です。

第3問は、国際社会、国際平和維持、国連安全保障について問う設問でした。平均正答率は41%程度で想定60%よりもかなり低いものとなりました。特に問2(2)、問4(1)・(3)、問5は30%を下回りました。国際社会に関する知識と理解は、これからの時代を生き抜くために必要なものです。教科書の内容をしっかりと学習し、時事問題を取り入れ、総合的に理解するのが大切です。

【2日目】

第1問は、日本銀行および日本国の金融政策を中心に問う設問でした。日米の金利差が話題になる今日、時宜にかなった設問であろうと思います。70%程度の正答率を想定していましたが、想定通りの結果でした。また、正答率は設問の難易度に応じて、比較的きれい

に分かれる結果ともなりました。基本的用語を問う問1(1)・(2)の正答率は80%以上ありましたが、歴史的な出来事を問う問4や金融政策の中核に関する問3(2)、問5(1)・(4)の正答率が60%を下回りました。その他の設問は、その間の正答率となっています。このように難易度に差はありますが、設問の内容は全て教科書にしっかりと掲載されているものばかりです。受験生の学習量の差も正答率に反映されていると考えられます。

第2問は、国民主権を基本に、世界の政治体制と日本の政治体制ならびに日本の選挙制度について基礎的な知識の総理解力を問う設問でした。平均正答率は68.9%と想定60%強よりやや高めとなりました。しかし、問1(1)・(2)、問2(2)は55%以下となっています。世界の政治体制、日本の国会、選挙制度について学習する際は、内容を通時的にしっかりと理解することを心がける必要があります。

第3問は、国際政治と民主政治を中心に問う設問でした。ロシアによるウクライナ侵攻が話題となる中で、受験生のみなさんに国際社会の動向を歴史的に俯瞰する視野をもってもらいたいというねらいがあります。平均正答率はおおよそ65%で、想定通りの結果でしたが、設問ごとの正答率には多少のばらつきがありました。基本用語に関する問2や問8の正答率は80%以上ありましたが、社会思想の学説に関する問1や問6(2)、国際関係や国際法のやや専門的なテーマに関する問3や問4（二つ目）、問7の正答率が60%を下回りました。これらの設問に正解するためには、用語をただ暗記するだけでなく、それぞれのテーマのポイントをしっかり押さえておく必要があります。

● 学習上のアドバイス

教科書を熟読し、しっかりと内容を把握することが重要です。受験生が日常的に耳にする事項と関連する設問は、全員が比較的よくできている傾向にあります。その一方で、教科書ではかなり詳しく説明されている事項でも、受験生の日常に直接関わりのないもので、意識して記憶しなければならない語句やそれらの知識の総合的理解が問われる設問は、正答率に大きな差が出る傾向があります。現実社会と照らし合わせたり、データや資料に向きあって客観的に読み解いたりすることが重要です。このため、刻々と変化する経済や社会の情報について、新聞記事やニュースなどを通して関心を持ち、事の本質を理解するよう、日々心がけてください。

● 出題の基本方針

出題範囲は「数学Ⅰ・Ⅱ・A」です。出題の主な目的は、基礎的な計算・数学的な思考ができるかどうか、公式を正しく理解して応用できるかどうかを問うことです。したがって、出題の基本方針として、難問や奇問を避けて基礎的な問題とその応用問題を中心に出题しています。

● 出題内容とねらい、採点講評

【1日目】

第1問は4つの基礎的な計算問題を出题しています。因数分解、集合と命題、対数、領域と最大・最小についての問題を出题しました。

第2問は2次関数のグラフについての理解を問う問題です。2次関数のグラフの頂点、グラフと直線が接するための条件、グラフと x 軸が共有点をもつための条件、グラフと x 軸の2つの交点を結ぶ線分の長さ、グラフの最小値に関する問題を出题しました。

第3問は確率に関する問題です。数字が書かれている黒球と白球が3個ずつあり、それらが入った袋から球を1個ずつ3回取り出す状況について出题しました。

第1問の正答率は6割超でした。問1は9割超、問2は6割弱～9割弱、問3は3割弱～4割、問4は4～6割でした。対数について出题した問3、領域と最大・最小に関して出题した問4は正答率が比較的低かったです。問3については、対数に関する諸条件を見逃したのではないかと想像します。教科書で対数の定義を見直し、理解を深めることが重要です。また、問4については、計算ミスが多かったのだと想像します。計算量が多いですが問題自体は基本的なので、落ち着いて解答できるように心がけましょう。

第2問の正答率は5割弱でした。問1は9割超、問2は5～6割、問3は4割弱、問4は1～3割でした。正答率が特に低かった問4は、定数 a の値について場合分けを行うことが必要な問題でした。定数が文字で表されていても、基本的な解き方は同じです。場合分けを一つ一つ丁寧に解きましょう。

第3問の正答率は6割超でした。問1は9割超、問2は9割弱、問3は2割超、問4は1割超でした。問1、問2の正答率の高さに対し、問3、問4は正答率が非常に低くなりました。問3、問4は場合分けがあり、計算量が多くなっています。落ち着いて解答することを心がけましょう。

【2日目】

第1問は4つの基礎的な計算問題を出题しています。因数分解、指数、集合と命題、データの分析についての問題を出题しました。

第2問は2次関数のグラフについての理解を問う問題です。2次関数のグラフの頂点、グラフと y 軸の交点の y 座標の最小値に関する問題、グラフと直線が接するための条件、グラフが x 軸のある範囲と異なる2点で交わるための条件を出题しました。

第3問は確率に関する問題です。赤球、青球、黄球、緑球の4種類の球が入った袋から、あるルールに従って球を取り出す状況について出题しました。

第1問の正答率は6割弱でした。問1は9割超、問2は6割弱～7割弱、問3は1割超～2割超、問4は4割超～9割超でした。集合と命題について出题した問3の正答率が特に低かったです。必要十分条件については教科書を見直し、条件の意味を理解することが重要です。

第2問の正答率は6割でした。問1は9割超、問2は3割超、問3は7割弱、問4は5割～6割弱でした。正答率が低かった問2はグラフと y 軸の交点の y 座標の最小値を求める問題でした。交点の y 座標は定数 a の値に応じて変わるため、定数 a がどのようなときに交点の y 座標が最小となるか求める必要がありました。問4は計算量が多い問題ですが、まずまずの正答率となりました。

第3問の正答率は7割でした。問1は4～9割、問2は6～7割でした。全体的にはまずまずの正答率でしたが、問1(iv)の条件付き確率に関する問題は正答率が4割と比較的低くなっていました。条件付き確率については、解き方を教科書で丁寧に確認しておきましょう。

● 学習上のアドバイス

出題の基本方針で述べたように、数学の問題では基礎的な演算能力や公式の理解力が問われます。難解な参考書を解く必要はありませんが、教科書で定義や公式を重点的に確認し、解けなかった問題は復習しましょう。公式については、単に暗記するだけでなく、その意味を理解できるようになることが重要です。また、計算量が多い問題では差がつきやすいため、繰り返し問題を解くことで計算力を身につけることも必要です。

● 出題の基本方針

例年通り、各方式・日程の正答率が60%前後となるように難易度に留意しながら、語彙、文法、会話、読解問題を配置し、英語の基礎力を総合的に測ることを基本方針としています。

● 出題内容とねらい、採点講評

出題内容

各方式・日程の第1問から第3問の構成は、概ね次のようになっています。

第1問 英文整序問題

第2問 文法・語彙・語法問題

第3問 会話文問題

第4問以降については、A・D方式では中文空所補充問題と長文読解問題、B方式では中文空所補充問題と中文読解問題、長文読解問題が続く構成です。

出題のねらい

- (1) 英文整序問題と文法・語彙・語法問題では、語彙・イディオム、文法・語法の基本的な知識が問われます。語彙や文法問題を解く際には、正解を得ることだけに満足せず、実際に自分で英文を書くつもりで、使えそうな表現を蓄えていくようにしましょう。
- (2) 会話文問題では、設定された場面において登場人物たちがどのような関係にあるのかを理解したうえで、自然な会話の流れを組み立てる能力が問われます。会話の力をつけるために、実際の場面で使われる多くの英語に触れ、慣用表現や面白いと思う表現を覚えるように努めましょう。
- (3) 中文空所補充問題は、語彙、文法・語法の面と、段落の構成の面から、英文の理解を問うものです。文レベルでは、正しくその構造をつかめているか、そして文章全体のレベルでは、それぞれの文の間にある論理的な関係を捉えているか、これらのポイントを確認するために、空所に入る適切な語（たとえば動詞の活用や接続詞など）の選択が求められています。
- (4) 中文読解問題、長文読解問題では、文挿入問題や語義説明・内容説明問題、テーマ選択問題、代名詞の指示対象の指摘問題、内容一致問題など、問題のパターンは多種多様ですが、ここで問われているのは、各段落とともに文章全体の内容把握力です。問題に取り組む際には、文章全体の主題は何か、その主題を提示するために、それぞれの段落はどのような役割を果たしているか、という視点で英文を読むように心がけてください。

採点講評

- (1) 英文整序問題および文法・語彙・語法問題は、比較的正確率が高い傾向にありますが、イディオムや前置詞の用法、あるいは関係詞に関わる問題では正確率は高くありませんでした。
- (2) 会話文問題は概ね正確率が高いものの、問題によっては正確率が伸びないものもありました。特にビジネスや大学生活の場面は、状況を把握するのに苦労した受験生もいたようです。会話文問題は、まず場面と登場人物の数および関係性の把握に努めましょう。
- (3) 中文空所補充問題は、全体的には想定した正確率に近いものでした。空所となるのは、基本的に論旨を正確に辿れているか、あるいは文の構造を正しく理解しているかを確認するのに適した箇所です。ことに接続詞や接続副詞および結果を表す副詞（句）は、しばしば論旨の理解を問うのに取り上げられます。普段からこのポイントに注目するとよいでしょう。
- (4) 中文読解問題、長文読解問題は、段落単位で理解するように努め、各段落が文章全体の主題の提示において果たす役割に目を向ける必要があります。正確率が低い傾向にあるのは文挿入問題と内容一致問題ですが、段落単位での理解を心がけることによって、これらの問題の正確率も自ずと上がると考えられます。なお、内容一致問題は、問題文中の対応箇所が1箇所だけとは限りません。ときには2文以上や問題文全体を対象とすることもありますから、注意が必要です。

● 学習上のアドバイス

外国語である英語の力を身につけるためには、語彙力と文法の知識は欠かせません。市販の単語帳などを使って基本語の習得を目指しましょう。また、教科書や問題集などで出くわした未知の単語は、その都度辞書で確認することを習慣づけ、意味だけでなく、その使い方も一緒に覚えるようにしましょう。

文法については、参考書を1冊手元に置いて、学習の際に不明な点があれば、絶えず参照するようにしましょう。また、不定詞、分詞、動名詞、時制、受動態、仮定法、関係詞などの項目を重点的に学習することをお勧めします。これらの知識の有無で英文読解の理解度が決定的に違ってきます。学習が進み、単語や文法の知識が増え、ある程度の英文が読めるようになったら、自分の関心のある分野の英文を読むことに挑戦してみてください。たくさんの英語を読むことによって、英語の知識が立体化されるはずです。

● 出題の基本方針

国語の出題の基本方針として次のような能力を期待し作問しています。

まず、ある程度の量の文章を読み通せることです。多くの問題の課題文は6ページ前後あります。時間内にこの量の文章を読み込み、考えて解く力が期待されます。次に、文章の意味を理解できることです。具体的には、文の意味、文章中の各段落間の関係を捉えられることが期待されます。たとえば文章の中の指示語の内容を適切に理解できているか、適切な接続詞を選ぶことができるか、文意において適切な文章の順番を導けるか。こうした形式の問題は、本文の理解について問うたものです。最後に、ことわざや熟語などの日本語表現や漢字の知識をもっていることです。以上のような能力を想定し、各問題は出題されています。

● 出題内容とねらい、採点講評

A方式1日目は第一問が大澤真幸『経済の起原』、第二問が玉井茂『西洋哲学物語』からの出題でした。前者は経済活動、後者は古代哲学に関する文章です。第一問において正答率が低かったものは問5(38.3%)、漢字問題問9の㊶(46.8%)でした。第二問において正答率が低かったものは問9(46.5%)、漢字問題問10の㊴(39.0%)でした。

A方式2日目は第一問が広瀬友紀『ちいさい言語学者の冒険』、第二問は阿部公彦『理想のリスニング』からの出題でした。どちらも言語コミュニケーションに関する文章です。第一問において正答率が低かったものは問3(20.7%)でした。第二問は全体的に正答率が高かったです。

A方式3日目は第一問が佐伯啓思『自由とは何か「自己責任論」から「理由なき殺人まで」』、第二問が久保明教『機械カニバリズム』からの出題でした。前者は「自由」とは何かについての文章、後者は機械と人間の関係を参照して人類学を理解しようとする文章です。第一問において正答率が低かったものは問1(47.5%)、問3(33.3%)、問4(30.3%)、漢字問題問9のうち㊶(32.9%)と㊷(15.1%)でした。第二問において正答率が低かったものは問3(28.2%)、問7(2.3%)、問8(44.5%)でした。

B方式1日目は第一問が亀山郁夫『人生百年の教養』、第二問(古典)が歌人である今川了俊による紀行文『道行きぶり』からの出題でした。前者は語学と教養についての文章、後者は了俊が長門国(現在の山

口県)に至った場面についての文章です。第一問において正答率が低かったものは問4(11.4%)、問5(37.3%)、問6(11.4%)、問7(13.3%)、漢字問題問11のうち㊸(46.2%)と㊹(9.4%)でした。第二問においては問1、問2、問9の正答率は60%を超えていましたが、それ以外は50%を下回っていました。

B方式2日目は第一問が好井裕明『他者を感じる社会学』、第二問(古典)が平安時代の歌物語である『伊勢物語』の第三段と第五段からの出題でした。前者は外見と他者との関わりに関する文章、後者は和歌を含んだ男女の物語です。第一問において正答率が低かったものは問5(15.3%)、問6(37.4%)、問8(16.7%)、漢字問題問11のうち㊶(28.0%)でした。第二問において正答率が低かったものは問1(46.9%)、問2(42.1%)、問3(21.8%)、問7(43.7%)、問9(25.1%)でした。

D方式は第一問が筒井淳也『仕事と家族』、第二問が根本彰『アーカイブの思想』からの出題でした。前者は労働と工業化、後者は書物の役割に関する文章です。第一問において正答率が低かったものは問7(41.4%)、問8(47.5%)でした。第二問において正答率が低かったものは問3(23.7%)、空所補充問題の問5(11.9%)でした。

● 学習上のアドバイス

国語の試験は多様なジャンルから、ある程度の量の文章が出題されます。日頃から様々なジャンルの文章をできるだけ多く読むことが大切です。

そのための学習として、少し長めの文章を読んでみましょう。初めのうちは、自分の関心のあるテーマのものでかまいません。できれば時間を決めておき、集中して読むことに慣れるとよいでしょう。そのうえで段落や文章全体の内容を正確に読み取る能力を身につけるようにしましょう。特に指示語の内容や、段落間の関係を示す接続詞に注目して読むことで、その文章が何を主張しているのか、より明確に理解することができます。

慣れてきたら、今度は読む文章のジャンルを変えてみましょう。幅広いジャンルの文章を読むことで、熟語やことわざなどの慣用表現の知識も増えていきます。知識が身につけば、さらに読むことが楽しくなるでしょう。漢字の問題は基本的に熟語についての知識を前提とするものなので、しっかり文章を読めるようになれば、自ずと解けるようになるはずです。

● 出題の基本方針

全方式・日程を通じて大問2題からなる出題です。そのうち、A方式・B方式は第1問が近世以前（江戸中期まで）、第2問が近代以後に分かれるのに対し、D方式のみ両問とも近代以後を出題範囲としています。

全方式・日程を通じて、古代から現代に至る全時代の様々な分野について網羅するように考慮しています。設問は語句選択、正誤問題、年代配列問題などで構成しています。全てマーク式の選択問題です。

問題作成にあたっては、高校の教科書に掲載されている内容からの出題を基本としています。教科書本文の記述に加え、説明を補完している写真や文献・史料、図表やグラフなども利用して、それぞれの出来事と時代背景との関わりを問うことを旨としています。

問題の難易度に関していえば、中には正答率の低いものも含まれますが、いわゆる難問・奇問の類は避け、高校での学習内容に即した出題を心がけています。

● 出題内容とねらい、採点講評

A方式1日目の第1問は、(1)旧石器～弥生時代の文化と社会、(2)平安時代前期の政治と文化、(3)室町時代の政治と経済、(4)江戸時代中～後期の外交・政治・文化（史料問題含む）から、第2問は、(1)自由民権運動と憲法、(2)明治時代末期から第二次世界大戦までの外交（特に日米関係）、(3)第二次世界大戦後の経済（特にエネルギー問題・公害。表問題含む）から出題しました。A方式2日目の第1問は、(1)平安時代の外交と文化（特に文学・日記）、(2)鎌倉時代後期の政治、(3)戦国時代の政治（一例として伊勢宗瑞）と文化（史料問題含む）、(4)江戸時代の政治と社会（特に自治・交通）から、第2問は、(1)明治時代における法制の近代化、(2)明治時代の学術、(3)明治時代の芸術、(4)大正政変、(5)第二次世界大戦直後の政治（特に政党・内閣）から出題しました。A方式3日目の第1問は、(1)奈良時代の税制（史料問題含む）、(2)鎌倉時代の武家社会、(3)江戸時代の村落社会、(4)江戸時代中期の政治と文化から、第2問は、(1)明治時代初期の文化（特に学術）、(2)国勢調査を通じて考える明治時代末期～大正時代の外交と財政（2020年が日本における国勢調査100周年だったことを踏まえた出題。図表問題含む）、(3)高橋是清の財政と経済（図表問題含む）、(4)国勢調査を通じて考える1950～80年代の外交と経済（図表問題含む）から出題しました。

B方式1日目の第1問は、(1)旧石器～縄文時代の生

活と信仰、(2)古代の法制・行政制度・税制、(3)茶を通じて考える鎌倉～江戸時代初期の政治・文化から、第2問は、(1)明治時代前期の殖産興業・文明開化、(2)日本の産業革命（史料問題含む）、(3)第一次世界大戦と関東大震災（図表問題含む）、(4)戦時統制下の経済・文化、(5)食料自給率を通じて考える1950～2000年代の経済（表問題）から出題しました。B方式2日目の第1問は、(1)奈良時代の文化（特に韻文・散文）、(2)建武の新政（史料問題）、(3)室町時代の沖縄と北海道、(4)江戸時代前期の外交・通商（史料問題）、(5)江戸時代前期の産業から、第2問は、(1)幕末の反幕府運動と社会、(2)明治時代の外交（特に条約）、(3)明治時代中～後期の経済（特に産業の近代化と貿易。図表問題含む）、(4)明治末期～昭和初期の経済と社会主義運動、(5)戦後改革から出題しました。

D方式の第1問は、(1)初期議会（史料問題）、(2)明治時代の教育、(3)明治時代のマスメディアと演劇（史料問題含む）から、第2問は、(1)大正時代の文化、(2)国際連盟脱退（史料問題）、(3)戦後改革と文化から出題しました。

採点結果から見られることとして、語句選択問題は正答率が総じて高くなりました。時代ごとの主要な出来事や登場人物については、かなり正確に把握できていると考えられます。一方で、図表類の読み取りから史実の説明や時代背景を考える問題については、正答率が低い傾向があります。教科書に登場する単語を単に暗記するにとどめず、統計資料などに反映される歴史の流れと史実との関連を理解しておいてください。

● 学習上のアドバイス

何よりもまず基本となる教科書の内容をしっかりと読み込んで理解することです。まずは、大きな歴史の流れに沿った主要な出来事の成り立ちや概要を俯瞰して理解してください。その際、時代の流れに沿って一つ一つの出来事をその前後関係から位置づけ、ストーリーとして理解しましょう。時代をまたいだ類似の制度などの細かな違いなども整理し、用語集や図録・史料集、年表なども活用して知識の補完をしてください。教科書に掲載されている画像や図表などからは、教科書の本文の背景にある詳細な事実を読み取ることができます。史料集などを読めば、ある史実を当時の人がどどのような文脈で理解したかを知ることができます。これら学習の成果は、今後も役立つ知的資産になります。

● 出題の基本方針

世界史の出題の基本方針は、高校の教科書に記載されている内容の理解を問うことです。多くの教科書に取り上げられている用語や事項などについての問題を作成するように心がけています。

時代や地域ごとに、政治、経済、文化などの幅広い分野から出題しています。空所補充問題だけでなく、内容の理解を問う文章選択問題、写真や図版などの資料を活用した問題もつくりました。

こうした出題方針には、単なる用語や出来事の暗記にとどまらず、それぞれの出来事の背景や連関（つながり）、その出来事が歴史上どのような意義をもっているのかなどを考えながら勉強してほしいという願いが込められています。

全方式・日程を通じて、大問を2題用意しています。原則として時代が古い方を第1問、新しい方を第2問としています。

● 出題内容とねらい、採点講評

出題のねらいは、一つ一つの出来事が、どのようにつながって、歴史の流れ（ストーリー）をつくっているかについて理解できているかを評価する点にあります。各設問に先立って用意されているリード文（本文）をよく読んでください。リード文は、様々な視点からテーマを設定し、歴史上の流れを描いています。個別の用語や出来事の丸暗記を重視しているわけではありません。

採点・点数については、試験日ごとに偏差値にもとづく得点調整が行われますので、受験日による有利不利はありません。

【A方式1日目】

第1問は殷から漢にかけての中国史、第2問は比較的幅広い時代にわたるヨーロッパ史から出題しました。正答率は第1問が70%台、第2問は50%程度でした。特に正答率の低かった問題は、第2問の間6と間19が挙げられます（正答率はどちらも20%前後）。間6は、ノルマンディー公国の位置はセヌ川の河口域であることを確認するものでした。歴史上の国家の位置は、河川、山地、島嶼などと紐づけて押さえておきたいですね。間19は、パリ講和条約（1947年）の締約国を問う問題です。第二次世界大戦の講和条約は複数あって複雑ですが、戦争の経緯とともにストーリーとして理解しておけば、きっと正解できるでしょう。

【A方式2日目】

第1問はヨーロッパ中世史、第2問は五代十国時代から明にかけての中国史から出題しました。正答率はどちらも70%以上で、よくできていました。

【A方式3日目】

第1問はトルコ（オスマン帝国）、第2問は近世から近代にかけてのヨーロッパ史を中心に出題しました。正答率は、第1問が約70%、第2問が50%程度でした。第2問の間11の正答率が24.6%と低めでした（正解は④）。この問題はフランスのルイ14世の治世下の出来事を時代順に並べさせるものでした。各出来事の年号を機械的に覚えるよりも、歴史の流れの中で捉えてみましょう。

【B方式1日目】

第1問はインド史、第2問はアメリカ史から出題しました。正答率は第1問が40%台、第2問は50%程度でした。インドは、2023年に人口が中国を抜いて世界一になるとの報道がありましたが、今後世界経済や国際政治、国際ビジネスで重要な位置を占めることが予想されます。ぜひこの機会にインドの歴史や文化を学んでみてください。

【B方式2日目】

第1問は古代ギリシア・ローマ、第2問は中国史（清）から出題しました。正答率は第1問が約65%、第2問は50%程度でした。第2問の間15の正答率は9.8%にとどまりました。この問題は清朝の最大版図に含まれる都市を問うものでした（正解は③ウルムチ）。普段から地図を眺めながら勉強してみましょう。

● 学習上のアドバイス

大阪経済大学が位置する関西をはじめ、日本各地の街を歩いていると、至るところに歴史的な建物や歴史上の人物・出来事を偲ぶ立て札や石碑を見かけます。外国の街にも、同じように歴史上の建物などがたくさんあります。美術館や博物館では、教科書に載っている美術品の実物を見ることができます。世界史を勉強していると、外国旅行が楽しくなりますよ。

一般的に、文化史に関する設問や、地図や画像を使用した設問の正答率が低くなる傾向が見られます。教科書にも多くの写真や地図が載っていますし、最近ではインターネットで写真や動画が手軽に見られるようになりました。勉強するときは、そうした視聴覚資料もぜひ積極的に活用してみてください。

● 出題の基本方針

2023年度入試の出題方針も例年通りです。教科書を中心として基礎的な知識とその応用を問うとともに、現代社会の現状や課題について主体的に関心をもって学習を深めていることができているかどうかを確認するために、深い知識や時事的な知識を問う問題も出題しています。

2023年度の出題分野は以下の通りです。A方式1日目は成人年齢引下げ・青年期と国際経済、2日目は高度情報社会と食料・農業問題、3日目は政治思想・宗教・政治問題と日本経済に関する出題です。広く現代社会に関する知識を問う出題となっています。

● 出題内容とねらい、採点講評

【A方式1日目】

第1問は、日本の成人年齢の引下げと青年期に関する設問です。①～④は、成人年齢引下げの具体的内容を問う出題です。⑤と⑥は、日本の婚姻、離婚状況を問うものです。⑦～⑩は、憲法改正・選挙権・裁判員制度など日本の政治制度に関する出題です。⑪～⑲は、青年期の若者の特徴に対しての様々な学者の主張について、知識と理解を問うものです。

第2問は、国際貿易を推進する仕組みと国際通貨体制の変遷に関する設問です。⑳～㉘は、自由貿易を推進する理論とGATTやWTOに関する出題です。㉙～㉛は、地域的経済統合の動きに関する設問です。欧州でのEU設立、単一通貨ユーロ誕生までの推移や、欧州以外での地域経済統合の変遷を問うものです。㉜～㉞は、国際通貨体制の変遷、特にブレトン・ウッズ体制とその崩壊について問うものです。

【A方式2日目】

第1問は、高度情報社会における諸問題に関する設問です。①～⑧は、高度情報社会の特徴について問うものです。⑨～⑮は、AI、5G、ビッグデータといった高度情報社会を支える技術やインフラ、著作権侵害や情報セキュリティなど高度情報社会が抱える課題に関する出題です。⑯～㉓は、情報技術を活用した行政サービス、選挙運動に関する出題です。

第2問は、ロシアによるウクライナ侵攻により関心が高まっている農業、食料問題に関する設問です。㉔～㉞は、世界や日本の食料の輸出・輸入、需要動向、食料自給率について問う出題です。㉟～㊱は、農地改

革から農業基本法の制定、食糧管理制度、そしてその後の規制緩和など、第二次世界大戦後の日本の農業政策の変遷について問う出題です。

【A方式3日目】

第1問は、政治思想や宗教、政治問題に関する設問です。①～④は、ホッブズの社会契約説について問うものです。⑤～⑨は、民主主義とその発達の推移に関する出題です。⑩～⑬は、イスラーム（イスラム教）など宗教に関する出題です。⑭～⑯は、2001年の同時多発テロとその背景について問うものです。⑰～㉒は、日本の汚職事件と政治改革について問う出題です。

第2問は、日本の第二次世界大戦以降の物価変動をテーマとした日本経済に関する設問です。㉓～㉞は、経済の基礎知識を問うものです。㉟～㉛は、第二次世界大戦後から朝鮮戦争による特需までの時期について問うものです。㉜～㉞は、第一次石油危機以降の時期に関する出題です。㉟～㊱は、1985年以降、特にバブル経済の崩壊を受けたデフレーションとその対応について問うものです。

● 学習上のアドバイス

多くの出題は教科書に基づいた基礎的な設問であり、教科書の内容をしっかりと学習することが第一に重要です。また、教科書には多くの図表が掲載されています。教科書の本文には詳述されていないことが図表を通じて理解できるように設定されています。これをさらに深く理解するためには、副読本や資料集だけでなく、新聞やインターネットなどの報道を活用して社会の動きを捉えることが必要です。また、現代社会の教科に特有な用語もあります。用語集をもとに用語を正確に理解するようにしてください。

また、現代社会は新たな多くの課題に次々直面しています。たとえば、ロシアによるウクライナ侵攻は、世界のエネルギー価格や食料価格の高騰を招いています。

重要なのは、新たな問題が生じたことで、教科書などで学んできた諸課題がどのように変化しているかに目を向けることです。教科書を学ぶだけでなく、現代社会が抱える問題に関心を抱き、新聞やインターネットなどから情報を収集することで、主体的に考察する姿勢が大切です。

● 出題の基本方針

出題範囲は「数学Ⅰ・Ⅱ・A」で、全方式・日程で問題に偏りがないように出題を行っています。出題分野は数と式、集合と命題、2次関数、図形と計量、データの分析、式と証明、複素数と方程式、図形と方程式、三角関数、指数・対数関数、微分法と積分法、場合の数と確率、図形の性質、整数の性質です。各方式・日程いずれも基本的な理解を問うことを目的としています。そのため、問題の水準は教科書の例題、演習問題、章末問題を基準にしたものを出題しています。

● 出題内容とねらい、採点講評

大学に入学後は、学部によって使う数学が異なるため、基礎的な数学的素養を幅広く問う形式になっています。そのため、全方式・日程とも、出題範囲からまんべんなく出題しています。ただし、B方式の第4問では、誘導問題の付いた長めの問題や、複数の分野の知識を使う複合的な問題を出题しています。しかしそれらも、基本的には教科書の問題を組み合わせたものを出题しています。正答率は、方式・日程によって異なりますが、A方式が5～6割程度、B方式が4割程度、D方式が5割程度です。以下では正答率が特に低かった問題について解説します。

【A方式1日目】

第3問(1)では、円Cの中心を (a, b) として、2つの円の共有点を通る直線を求めます。求めた直線には a と b の変数で表現される部分がありますが、これらは与えられた直線の式に対応するため、比として考えれば解答できます。

【A方式2日目】

第2問(3)では、正八面体に内接する球の半径を求めます。自分で図を描き、図形のイメージを認識できるかがポイントです。イメージできれば、三平方の定理を用いて必要な線分の長さを求めると解答できます。

【A方式3日目】

正答率が特に低い問題はありませんでした。

【B方式1日目】

第4問のウ、エの正答率が低かったため、それに続く問題も正答率は低くなりました。ウ、エは、 y, z を

解としてもつ2次方程式を考え、その判別式から求めることができます。このとき、 $y+z=-x$ と $yz=x^2+3x$ を利用します(解と係数の関係)。このような解き方をすることに不慣れだと思いますが、アとイの計算が誘導になっています。

【B方式2日目】

第4問の(2)の正答率が低かったため、それに続く問題も正答率は低くなりました。ある程度の計算量があること、また最終問題のため時間的に困難だったことが正答率の低さの要因だと思われます。(2)は、 $b=-c$ とし、相関係数の定義に当てはめれば解答できます。(3)の p の範囲は相関係数を求めることなく、共分散から解答できます。 y の標準偏差の範囲については、 y は p 以外の最大値が6なので、 p が6より大きくなるほど標準偏差は増えます。つまり、 $p=6$ のときに y の標準偏差は最小です。計算を減らす工夫も必要になります。

【D方式】

第3問の(2)では、2次関数の係数を求めます。これは「全ての実数 x, y, z に対して…が成立する」となっているため、恒等式として考えれば解答できます。

最後に全体的な採点の講評としては、2次関数・3次関数・指数関数・対数関数・三角関数を用いた方程式や関数の最大・最小の問題については正答率が比較的高いです。特に指数関数・対数関数の計算の正答率は以前より上がってきていると思います。一方で、図形の問題は基本的な問題でも正答率が低い傾向がありました。

● 学習上のアドバイス

教科書を用いた学習が基本です。基本的な問題を確実に解けるようにしてください。その際、図やグラフをきちんと作図することも重要です。これまで本学で出題された応用力を問う難しい問題も、図が描けると難易度が下がる問題が多いと思います。

また、特定の分野だけでなく、幅広く学習することも必要です。さらに、試験時間の割に問題数はやや多いと思われるため、日々の学習では基本問題を繰り返し反復するような学習が望まれます。

● 出題内容

黒田龍之助「わーるど・いんぐりっしず」(『ポケットに外国語を』所収、ちくま文庫、2013年)より抜粋し、一部を変更して出題しました。大意は以下の三点です。

①英語を国際的な共通語として学ぶ場合には、特定の英語圏文化を強要できない。

②英語は、国際語になるにあたって地域文化を捨てたが、文化を排除した語学には楽しみがない。英米文化に限らず、世界中の文化に触れるのが得策であろう。

③世界中で英語が使われている現状では、一部の英語だけがステータスをもつことはない。したがって、世界中の様々な英語を学ぶ機会を設けてはどうか。

問1は300字以内の本文要約、問2は500字以内の意見論述で外国語をどのように学ぶのが良いかと思うところを述べることを求めました。

● 採点方法

問1および問2とも、2名が採点にあたり、平均点を得点としています。課題文の内容を正しく把握したうえで、適切な論述を行っているかを、文章の表現と構成に注意しつつ採点し、本学で学ぶにあたって十分な学力を備えているか否かの判断を下しました。

● 講評

問1は平易な言葉で書かれた文章であることに加え、パラグラフごとの大意が明確であったためか、概ね出来はよかったと言えます。

問2は本文の大意を踏まえたうえで、理想とする英語の学習方法を論じる答案が多く見受けられました。用いられる語彙や表現の水準および、自らの主張を根拠づける論理構成の巧拙が、答案の出来を左右する主な要因となりました。

● 出題内容

エイミー・C・エドモンドソン『恐れのない組織』の一説を出題しました。この文章に基づく設問を2問設定し、問1は本文の要約を300字以内で記述、問2は「フィアレスな組織をつくるためには、何を必要とするか」について、自身の意見を500字以内で書くことを求めました。

● 採点方法

60点を上限として、問1を30点、問2を30点の配点としました。各問についてABC評価とし、A30点、B20点、C10点を基準としました。

問1は、文章全体をバランスよく網羅し、キーワードが入った記述になっているか、偏った記述になっていないかを重視しました。

問2は、受験生の考えに基づく説明であることを重視しました。論旨の一貫性や内容の具体性について評価しました。

● 講評

問1については、ほとんどの受験生が正しく要約できていました。そのため、誤字・誤読をした受験生が目立つ結果となりました。

問2は、「フィアレスな組織をつくるためには、何を必要とするか」について、一般的な解答が多くあった中で、具体的に自身の経験を結びつけて書いている受験生は、評価が高い傾向となりました。また、事前に用意していたと思われる文章に無理に結びつけているような解答も見られました。

小論文

出題のねらいと講評

● 出題内容

2022年2月20日『読売新聞』（朝刊）の「北京五輪閉幕 選手活躍でも残る後味の悪さ」という記事からの出題でした。内容は、日本選手団の活躍、日本勢躍進の理由、大会での採点基準のあいまいさや微妙な判定があったこと、ドーピング問題を含めた競技における公平・公正の問題、さらに課題として運営面や競技環境の問題（コロナ感染や屋外競技での負傷など）、特定国の政治利用や人権問題も示されていました。

問1は、本文のポイント4点を挙げ、その要約を求めるものでした。問2は、未来に期待するオリンピック競技大会の姿に対する自身の意見を求めるものでした。

● 採点方法

採点者は4名で、各2名がペアとなり同一問題をそれぞれが採点し、その平均値を四捨五入して総計点としています。問1については4つのポイントを各10点とし、40点満点としています。問2も40点満点であり、総計80点としています。

評価方法としては、問1は、1点刻みで、字数（1～3点）、丁寧さ（1～3点）、的確さ（2～4点）とし、10点満点の4つで40点としています。問2は、2点刻みで、字数（4～10点）、丁寧さ（4～10点）、文章力（4～10点）、斬新さ・ユニークさ（4～10点）とし、総計40点となります。

全体の平均点は、満点80点で60点後半であり、大きな点数差はありませんでした。

● 講評

問1・問2を通じて全体的によくできていたと感じられました。

問1については、示した4つのポイントが欠落している解答や、2つ以上のポイントを1つにまとめてしまった解答も散見されましたが、ほとんどが出題の意図に沿うものでした。

問2については、本文それ自体を要約したものや、自身の意見が十分に示せていなかった解答も見られましたが、概ね本文を理解したうえで、明瞭に解答されています。

特筆されることは、今回の答案を見る限り、字数についてはほぼ全員が一定量を達成していました。また、文章力も高レベルであり、読むに堪えないものはありませんでした。受験生全員が十分な受験対策を行っていたものと思われます。

小論文

出題のねらいと講評

● 出題内容

太田肇『同調圧力の正体』（PHP新書、2021年）の一部から出題しました。

この文章に基づく設問を2問設定し、問1は本文の要約を100字以内で記述、問2は本文の内容を踏まえ、自身の考えを800字以内で書くことを求めました。

● 採点方法

問1は、課題文の内容を正しく読み取り、要約しているかという観点から採点しました。

問2は、文章表現、構成という形式的側面と主張と根拠の妥当性、解決策の提示などといった内容的側面の両面から評価をしました。

● 講評

30点満点で採点をした結果、最高得点が27点、最低点が7点、平均が16.6点でした。

高得点の解答には、主張が明確であったこと、主張への道筋が論理的であったこと、反対意見などを提示し、複数の観点から対象を捉えていたこと、現状追認ではなく、現状を変えたいという意志が見られること、という共通する特徴がありました。